



BUJYO コミュニティ・スクール通信

蕪城小学校学校運営協議会通信 第5号/令和8年1月発行

第3回学校運営協議会が、1月22日（木）に開催されました。会議次第は以下のとおりです。

- 1 開会のあいさつ
- 2 協議事項
 - (1) 後期学校評価と授業参観の所感
 - (2) 2学期学校支援ボランティア活用状況及びコーディネータ活動報告
 - (3) 令和8年度学校運営協議会活動計画案
 - (4) その他
 - ・令和8年度学校運営協議会コーディネータの選任
- 3 閉会のあいさつ

○後期学校評価

＊学校だより No.14 で、テトル及び学校ホームページに掲載 後期学校評価結果について、齊田研究主任、福嶋生徒指導主事、坂井主幹教諭、小山教頭が説明。

【学習指導 自ら考え、自ら学ぶ子】

評価結果は、全般に向上した。しかし、児童評価で C,D があることから今後も指導方法の共有・改善に努める。

家庭学習を進めるため自学ノートの取り組みを行っている。さらに質の高いものになるよう自学ノートを自学のひろばに展示し、手に取ってみることができるようにしている。

【生徒指導 やさしく、思いやりのある子】

いじめやトラブルなどについては、迅速な組織的対応を継続して行っていく。

あいさつについては、児童自ら行えるよう継続して指導していく。このため児童会の取り組みも行っていく。また、見守り隊の方の顔と名前が分かるように職員室前の掲示を更新する。

自己有用感（だれかの役に立っている）を高めるため「キラキラカード（いいところみつけ）」「ありがとうカード・ありがとうの木」の取り組みを継続していく。

＊「自己有用感」とは

「自己有用感」は、他人の役に立った、他人に喜んでもらった、…等、相手の存在なしには生まれてこない感情

自分に対する他者からの評価が中心

「自尊感情」とは

心理学用語 Self Esteem の訳語として定着した概念です。一般的には、「自己肯定感」「自己存在感」「自己効力感」等の語などと、ほぼ同じ意味合いで用いられているようです。

自分に対する自己評価が中心

「自己有用感」の獲得が「自尊感情」の獲得につながるであろうことは、容易に想像できます。

しかしながら、「自尊感情」が高いことは、必ずしも「自己有用感」の高さを意味しません。



自己有用感を育てるのは、個人の「幸福感」だけでなく、社会生活における「意欲」や「良好な人間関係」の土台となるためです。

- ・学習などへの積極的な姿勢が習慣付く
- ・人を思いやる気持ちが身につく
- ・良好な人間関係維持に役立つ

【特別活動・保健体育指導 たくましい子】

冬季の体力向上のためなわとびを行っている。学校全体で3万回のチャレンジを目標に取り組んでいる。

○授業参観の所感

- ＊子どもは、大変落ち着いて学習していた。
- ＊孫の成長を見るにつけ学校の指導に感謝している。
- ＊先生と良い関係が築かれていると感じた。
- ＊ICTによる授業が、当たり前となっている。
- ＊道徳の授業について、同学年の4クラスで違ったテーマで学習しているのは？
 - ・チーム担任制の一環として、学年内で4人の担任が他クラスの授業も行っている。
- A 先生が、一つのテーマを自分のクラスを含め全クラスで行う。本日は、その1回目でありテーマは異なることになっている。

○令和8年度学校運営計画案について承認された。

再度、新年度に計画内容を確認し実施する。

○諸般の意見

トイレの改修を教育委員会に要望すればどうかという意見が出された。対応は、校長先生に一任された。

（文責 コーディネータ 池田）

「褒めること」と「認めること」の違いは？

大人の側にしてみれば、この両者の違いはあってないようなものでしょう。「認めてあげようと思って、褒めている」「褒めることは、そのまま認めること」という感覚なのではないでしょうか。そして、多くの子供も、そんな感じで受け止めていることでしょう。とりわけ、年齢が低いほど、その差はないに等しいに違いありません。

しかし、「認めてほしい」「認めてもらいたい」と強く思っている子供には、そんな大人の言い分は通じないかも知れません。中には、「褒められてもうれしくない」といった子供も出てきたりするのです。一体、何が違うのでしょうか。

大人が子供を「褒める」ときは、一般に大人の基準や水準で「褒める」ことが多いように思われます。そして、大人の側^{がわ}の基準で一定の水準に達した、水準を超えたと評価するのが「褒める」という行為と言えます。反対に言えば、水準に達しない場合には「頑張りなさい」と叱咤激励することはあっても、褒めることは稀^{まれ}でしょう。

それに対して、子供が「認めてもらいたい」ときというのは、一般に子供の基準や水準で「褒められたい」のではないのでしょうか。子供なりのこだわりで努力したり工夫したりしたことを「認められたい」のです。だから、大人の考えた基準に達していなくとも「褒めてほしい」と考えたり、大人の考えた水準に到達して「褒められた」場合でさえ、大人の基準とは異なる子供の基準でも「褒めてほしい」と考えたりするわけです。

だから、自分がさほど努力もしていない、自分の功績ではないことを、「みなさん、よく頑張りましたね」と全員を一括りにして褒められても、さほどうれしくもなく、励みにもならないのかも知れません。子供の実際の行動と向き合うことなく、表面的にお世辞を言ったり、ちやほやしたりしても、子供の「自己有用感」はおろか、「自尊感情」すら高めない可能性が高いのです。

行事に取り組む、学習に取り組む際などに、子供自身に目標や工夫する点、努力する点などを考えさせておき、その基準に沿ってどこまで達成できたのかを評価することが「認める」という行為では重要になります。それが、「自己有用感」を育むのです。単に良かった・悪かったと評価するだけの「褒める」では、「自尊感情」を育むことはできても、「自己有用感」を育むことにはなりにくいのです。

例えば、「ふりかえりシート」を用いているのであれば、児童生徒の振り返りに対して、ただ「頑張ったね」とだけ書くのではなく、その児童生徒が「こだわった」「見てほしかった」点に触れた記述を返しましょう。そのためにも、一人一人をきちんと見ることが大切です。